

水野 秋著

『太田薫とその時代』

「総評」労働運動の栄光と敗退』

評者：五十嵐 仁

力作である。上巻446頁，下巻528頁という分量だけでなく，太田薫という傑出した指導者に焦点を当てながら，「『総評』労働運動の栄光と敗退」を余すところなく語り尽くした内容からいっても力作である。

しかもこれだけの大部の著作を，臨場感あふれた語り口で書き通す力量は並みのものではない。労働記者として現場に身を置き運動を目撃してきた「労働ジャーナリスト40年」のキャリアと，それを記事にして書き続けてきた物書きとしての力が，それを可能にさせたのであろう。

*

本書を読んで，改めて教えられたことも多い。たとえば，太田は「各単産の委員長がGHQに呼ばれ，労働課長のエーミスからレッド・ページへの協力を要請された時，きっぱり拒否した」（上，82頁）こと，「上京した太田は高野によっていきなり中労委の労働側委員に推薦された」（上，84頁）こと，安保闘争で共闘組織の結成について意見交換したとき，「太田はこの席上で共産党を正式なメンバーに加えることを提案した」（上，215頁）ことなどである。

また，民社党の結成にあたって，「太田と岩井は，戦前は日労系と呼ばれた河上派のメンバーを個別に訪ねて，今後の選挙では総評の組織

を上げて優先的に支援することを約束しながら西尾派に同調しないよう説得に努めた」（上，234頁）こと，和田博雄への対応や『社会タイムス』の後始末などで見せた江田三郎の無責任な態度への「拭いがたい不信感が，そのまま『構造改革論』への疑問につながっていた」（上，278頁）こと，臨時行政調査会（第一臨調）の委員を選ぶとき，池田首相が滝田実の起用を予定して吉田茂に意見を求めたところ，「吉田は即座に『労働界から入れるなら太田だ，あれしかない』と述べ，この鶴の一声で太田の起用が決まった」（上，312頁）ことなども，意外に知られていない秘話だといえよう。

このほか，談話の発表などでジャーナリズムを駆使し，太田はマスコミ対策に長けていたこと，64年の太田・池田会談のきっかけは『毎日新聞』の企画にあったこと，79年の都知事選への立候補は，富塚総評事務局長からの要請によるもので，それは77年10月8日のことであったことなども，本書から知った点である。

本書には，興味深いエピソードも記されている。三井・三池争議で総評が事態收拾の方針を決め，三池の組合員を説得するために太田が大牟田に向かったときのことである。

「三池の組合員や主婦に，何を，どう説明すればいいか，考えれば考えるほどまとまらなかった。翌朝，大牟田へ向かう西鉄の駅のプラットフォームで『太田君』と呼ばれて，ふりむくと，何と思いがけなく向坂逸郎が立っていた。あまりの偶然に驚きながらもそのまま二人で大牟田へ向かった。

その車中における向坂の話が太田をまたもや驚かした。『太田君，がんばれよ。君の思う通りにやりなさい。大衆に迎合してその場限りのうそや，ごまかしちゃあいけんよ……』，その瞬間まで太田は，向坂がまったく逆のことを云うのではないのかと思ひこんでいただけに『あ

っ、この人はやっぱり問題がわかっているのだ」と、感銘深く受けとめた。」(上、267～268頁)

*

しかし、その反面、いくつかの問題もある。その最大のものは、長すぎるということである。全部で1000頁近くになる本書を読み通すのはかなり困難であり、どれだけの人が通読できるのかと心配になってしまった。

これだけ長くなったのは、「総評」労働運動や化学労働戦線の動向の細部まできちっと書き込んでいるからで、これらの運動の中で果たしてきた太田の役割を微細漏らさず明らかにしようという著者の意欲によるものだと思う。たとえば、主要な総評大会や合化労連大会での論議、労働戦線統一問題をめぐる動きなど、その経緯と論点が克明に記述されている。ポイントを押さえながらこれらの議論を要約することは、それだけでも大変な労力を要するものだったにちがいない。

春闘については、それが始まった経緯や毎年の経過が、要求や妥結の内容まで含めて、1年の欠落もなく律儀に追跡されている。国鉄のマル生反対運動やスト権ストなど、総評労働運動にとっては重要であっても太田が直接かかわらなかった運動まで、きちんとフォローされている。合化労連を含む化学分野の労働組合の動向が系統的に記述されているのはもちろんである。

このため、本書は「総評」労働運動・化学労働運動史ともいえる実質を備えている。副題が「『総評』労働運動の栄光と敗退」となっているのはそのためであろう。本書を読むことによって、「総評」労働運動や化学分野の労働運動の内側から眺めた戦後日本の労働運動の流れを知ることができる。

しかし他面で、このような本書の方法は、二つの問題を生むことになった。一つは、総評と

合化労連などの動きを克明に追っている割には、その運動の政治・経済的な背景が十分に説明されていないということである。総評や化学分野の運動を追うことに力を入れ、その記述が膨大になってしまったために、運動の背景にまで手が回らなかったということであろう。

もう一つは、太田黨の「伝記」であるにもかかわらず、「総評」労働運動についての記述の中に太田が埋もれてしまっているということである。それは、背景となる総評や合化労連の運動についての叙述の方が圧倒的に多いためだと思う。

太田が総評や合化労連の運動に公的な立場でかかわっている限りでは、これはそれほどの問題ではない。これらの運動との関連で太田が登場するからである。しかし、都知事選に立候補して落選し、運動の第一線から退いて以降になると、そうはいかない。本書の叙述からは太田が消えてしまう。

晩年の太田は、太田黨事務所を作ったり、労戦統一の動きとの関連で市川・岩井と共に総評三顧問の一人として様々な提言を行ったり、労研センターを作ったり、それなりの活動を行っている。しかし、これらについてはほとんど触れられず、その実態は良く分からない。

総評の解散や全労協の結成に向けて、太田は何を考え、どのように行動し、どのような役割を果たしたのだろうか。国鉄民営化、全労協の結成、国労の分裂、民間連合の結成、官・民の統一などの叙述は豊富だが、このような中で太田がどうしていたのかについては、十分にフォローされていないように見える。

*

この点とも関連するが、本書全体を通読して、あまり太田の肉声が聞こえてこないという不満を感じず。本書で引用されている太田の発言の多くは「公的」なものであって、「私的」なも

の、特に太田の思考や心情などを示すような肉声はあまり聞こえてこない。これは、太田が亡くなってから執筆を思い立ち、インタビューする機会がなかったという本書の成り立ちや、「都知事選に出馬し、労働運動の第一線から事実上引退された直後から絶縁状態になっていた」(上、頁)という筆者と太田との関係などからくる制約であろう。

しかし、太田は労働運動指導者としては異例なほど多くの著作や記事を残している。活字になっている発言も沢山ある。これらの材料が十分に生かされているのかどうか、気になるところである。

このことは、太田の行動に隠されている謎が十分に解明されていないのではないかという思いにもつながる。たとえば、若いころ太田は、宇部興産の企画課長、宇部市議会議員、宇部窒素労組委員長という三つの選択に直面している。結局、太田は労働運動に身を投ずるわけだが、他の二つではなく、なぜこの道を選んだのだろうか。

また、労働運動に入って以降、太田は総同盟に属して「右派の面々から労組結成の手ほどきを受け」(上、84頁)、貴重な教えを受けた先輩として「旧総同盟右派の熊本虎蔵と渡辺年之助の二人の名をあげている」(上、60頁)というが、総評結成後は、「水曜会」という左派グループを形成し」(上、103頁)、社会主義協会の設立に関わり、左派社会党に属することになる。左に旋回するわけである。

その後も、「労働戦線の右翼的再編・統一の流れに投じて総評を批判し、更にはまたもや左へ戻って社・共を基盤に都知事選に出馬するという、右往左往をくりかえし」(下、349頁)、80年代に入って以降、今度は左の立場から総評を批判する。このような太田の軌跡をどう理解したらよいのだろうか。そこに立場や思想の変

化があったとすれば、それはどのようなものだったのだろうか。

総評幹部となってからの高野との対立やそれが春闘の構想に結びついていく経緯、総評議長に立候補する経過などについてはそれなりに明らかにされているが、良く分からないのは、議長を辞めてから、何度も副議長になろうとすることである。67年の美濃部選挙の時に都知事に立候補しようとしたり、ポスト美濃部で都知事選に立候補して落選したあと、また合化労連委員長に返り咲こうとしたり、対立候補を立てたりすることもあった。

なぜ太田は、一見すると不可解に見えるこれらの「異常な行動」をとろうとしたのだろうか。これらの行動の背後にある考え方や心の動きなどについて、十分な説明がなされていないように思われる。これらの一見、不可解と思われる行動を分析することによってこそ、太田の人間性が浮かび上がってくるのではないだろうか。

もう一つ、太田についての重要な「謎」がある。それは社会党員でありながら、共産党に対する排除の論理を持たなかったという点である。議長という総評のトップに上りつめながら「反共主義」とらわれていなかった、あるいは「反共主義」の立場ではなかったにもかかわらず総評のトップに立てたというこの事実は、日本における労働運動のトップ・リーダーとしては希な例となっている。

太田は、何故、そのような立場をとることになったのか。太田においてそれが可能だったのは何故なのか。その思想形成や政治思想における特徴はどこにあったのか。これらの問題についての解明も残された課題だと言えよう。

*

本書の表題は『太田薫とその時代』となっている。つまり、内容的にいえば「太田薫伝」と「総評・化学労働運動史伝」の2本柱である。

しかも、後者の比重が圧倒的に大きい。「太田薫伝」という点からすれば、この点で不満を持つ読者がいるかもしれない。評者も、この二つの内容を別の著作とした方が良かったかもしれないと思わないわけではない。そちらの方がずっと分量も少なく、読みやすいものになっただろう。

しかし、著者はそうしなかった。それはおそらく、総評や合化労連の運動と太田薫は一体化しており両者を切り離すことはできない、総評の太田であり合化の太田である、と考えたからだろう。太田の立場から見た「総評」労働運動

史として本書は有益であり、特に複雑な経緯をたどった化学分野での労働運動を系統的にたどることができる数少ない文献になっている。

いずれにしても、著者は本書を書くことによって2冊分以上の仕事をした。病軀にむち打って本書を完成させた、その執念と労苦には頭が下がる思いがする。

(水野秋著『太田薫とその時代 「総評」労働運動の栄光と敗退』同盟出版サービス株式会社、2002年4月刊、上 xiv + 446頁、下 ix + 528頁、定価上2,500円 + 税、下2,500円 + 税)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授)

規制緩和と 労働者・労働法制

萬井隆令
脇田 滋 編
伍賀一道

A5判・並製
定価 (本体3800円 + 税)

労働法制の規制緩和は
働く者に
どのような影響を
与えるか

(主な内容)

第一章 規制緩和と政策と社会的
人権
ならびに労働法の課題

第二章 雇用の弾力化・規制緩和の
展開と労働者

第三章 雇用の流動化・規制緩和を
めぐる理論の諸相

第四章 労働者保護法制と規制緩和
―現状と課題

旬報社

東京都文京区目白台2-14-13 電話03(3943)9911 FAX03(3943)8306